

49. 高知県高幡地域におけるパーキンソン病・類縁疾患の疫学・実態調査:第2報

大崎康史、森田ゆかり、桑原朋、宮野伊知郎¹、土居義典

高知大学医学部 老年病・循環器・神経内科学

¹ 予防医学・地域医療学分野

「背景と目的」:わが国ではパーキンソン病(PD)の有病率は人口 10 万人あたり 110 程度、進行性核上性麻痺(PSP)は 6 と報告されているが、高知県ではより多い印象がある。またパーキンソン病・類縁疾患の患者さんの治療・ケアに際しては、確定診断、ADL、QOL、病状の平均的進展などを把握する必要があるが、我が国ではまだ詳細に検討されていない。

そこで我々は、人口約 66,000 人(高齢者人口 32%)の高幡地域での PD、PSP、多系統萎縮症(MSA)、皮質基底核変性症(CBD)の患者の実態を把握し、自宅・地域生活での問題点を明らかにすることを目的とした。また最も有病率の高い PD では、PDQ-39 を用いて HR-QOL を把握し、阻害因子を検討した。

「方法」:福祉保健所、医師会、介護施設などの協力を得て、上記疾患の可能性のある患者を病院、介護施設、グループホーム、自宅などで診察し、臨床診断を行った。

PD については、年齢、性別、罹病期間、HY 重症度、UPDRS II、UPDRS III、認知症・抑うつ・姿勢反射障害・構音障害・嚥下障害・排尿障害の有無、レボドパ換算量、配偶者・入所入院の有無などを評価した。PDQ-39 は患者さんまたは主たる介護者が記録するように依頼して配布し、郵便で回収した。PDQ-39 スコア(S)は 100 点満点に換算し、ステップワイズ法で多重回帰解析を行った。

「結果」:粗有病率は PD、PSP、MSA、CBD の順に、175、18、17、9 であった。2005 年の人口を標準として訂正有病率を算出すると、109、10、13、6 であった。

PD では発症年齢と現在の年齢は平均 67 歳と 75 歳、性別では女性に多く、認知症の合併は 25%、入所・入院は 31%であった。類縁疾患の発症年齢と現在の年齢は、PSP:平均 76 歳と 81 歳、MSA:63 歳と 68 歳、CBD:71 歳と 75 歳であった。

PD 全体(109 名)の S は平均 44(SD:24)で、UPDRS II、レボドパ換算量、姿勢反射障害、UPDRS III、認知症が有意に寄与していた。認知症あり群(83 名)の S は 37(21)で UPDRS II のみが有意に寄与し、認知症なし群(26 名)の S は 67(15)で HY 重症度のみが有意に寄与した。

「まとめ」:PD の粗有病率は従来の報告よりはやや高く、人口の高齢化が背景と考えた。PD の罹病期間は類縁疾患より長く、また PD 患者の HR-QOL には、運動機能重症度、ADL、薬物量、認知症が寄与していた。PSP と MSA の粗有病率も従来の報告よりも高かった。これらを考慮した治療・ケアプランが望まれている。